

# 地方都市中心市街地における デザイン・アートワークの役割 その3 プリン長岡における実践

## A Case Study on a Function of Design Art Works at the Central Area of a Domestic City.

遠藤 良太郎

ENDO Ryotaro

池田 光宏

IKEDA Mitsuhiro

澤田 雅浩 (2016 年度・2017 年度)

SAWADA Masahiro

山田 博行

YAMADA Hiroyuki

キーワード：低未利用空間、地方都市中心市街地、アートワーク、アートスペース

Keywords：Empty Space, Domestic Cities, Art Work  
Art Space

There is a lot of empty spaces in the center of a local city. On the other hand, some people want to work in these area. A variety of activities have possibilities to improve the vitality of the city. Design and artwork is good compatibility with the spaces of the city. By performing the design and artwork in the empty space, to study whether there is any impacts on the town.

### 1. はじめに

長岡では、市役所のある「アオーレ長岡」や「まちなかキャンパス長岡」の設置をはじめ新たな再開発の計画もあり、中心市街地の再生が進んでいる。その一方で再開発等の大規模事業対象地域外では空きスペースが増大している。1 階部分の空きスペースの中には飲食店等が店出し状況には変動があるが、道路に面していない2 階より上層または地下階（軒数は多くはないが）は空き状態が慢性化しており、オーナーが積極的な利活用に対して特段の関心がない場合はマーケットに出ないなど、潜在的にはかなりの未利用空間が存在している。

昨今のデザイン・アート分野において、例えば1960～70 年代のロンドンやニューヨークに端を発するアーティストやデザイナーの制作場所（スタジオ、アトリエ等）として、同様の状況にある街が再生されていく事例は枚挙に

いとまがない。こうした状況は日本国内でも1990 年代後半以降活発に発生しており、不動産賃貸の形態の変化（シェアが許容されたり、店子のリノベーションに自由度を与えたり等）と相まって、停滞した地域の一つの打開策のように捉えられてきた経緯がある。こうした事例を元に長岡においてデザイナーやアーティスト、または地域に住むこれらの愛好家（もちろん長岡造形大学の卒業生も含む）との有機的な連携や組織化を企図することは、単なる共同作業を超えたオルタナティブな拠点として、人の意識や場の意味の変革を促す契機として様々な可能性をはらんでいると考えられる。一方で、デザインの大学を標榜する本学の立脚する街として鑑みると、デザイン及びアートを含めた分野の街中での展開は活発であるとは言えない状況にある。

本研究はこのオルタナティブなスペースをアートスペースと想定し長岡独自の場についてその実現の可能性を、実際に空き物件を賃借し、そのリノベーションとともに様々な活動を通じて実験的に探る研究である。

### 2. 研究の方法

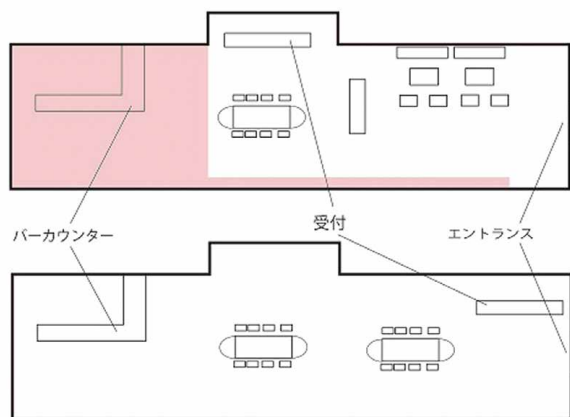
今回は3 年間の研究期間の3 年目となる。2 年目までの経緯は長岡造形大学紀要14 号と15 号\*に記した通りである。当初、長岡の中心市街地においてアートスペース構築の前例もなく、本研究に携わる4 名の研究者のうち3 名が着任したばかりということもあり、街のアートを取り巻く状況について情報が乏しい中でスタートした。そこで各年度、及び3 年間の計画、目標は大まかに設定しつつも、学生との協働による展示、ワークショップ、イベントを順次立ち上げ、発生する具体的な状況に対応しながら進めることになった。また各活動の関係や連関、結果などは特に設定せず実験的な取り組みとして始めた。3 年間の経緯を事後的に大まかに記しておく、初年度は場所の設立に、2 年目は実験的なプロジェクトを実施、3 年目はプロジェクトの継続的实施というものであった。これらの、いわゆる動かしながら考えるというような緩やかな方針は、研究活動の置かれた街場についてのノウハウが乏しい中で必然的に取らざるを得なかったスタンスとはいえ、この研究によってこういった状況が発生するのか（ポジティブ、ネガティブ両面の問題）、またその活動がどのような波及効果を生み出すのかを観察することや、継起的に発生する事象の観察においても有効であった。

今年度もこれまでと同様、長岡市がまち・ひと・しごと創生法に基づき地方創生版総合戦略として策定した「長岡リジェネレーション（長岡若返り戦略）平成27 年10 月策定」を受けて設立された「ながおか・若者・しごと機構（以下「若者機構」）」と共に「プリン長岡（プリン＝プロジェクト、リンク）」での研究活動となる。中心市街地における空き物件の利活用という使命を帯びつつ、さまざまな参与的活動を通して本研究の主題であるアートスペースという空間、場の構築により長岡にどのような定着の仕方があるのかを捉えようとしてきた。

### 3. プリン長岡での2018 年度の研究活動

この研究は、拠点とするプリン長岡をもう一つの主体である「若者機構」とシェアという形態で進めてきた。この

関係性、連携面において若干の問題が顕在化してきたなかで（参照：紀要 15 号 p.39、40）、その調整から始まることとなった。これは若者機構が掲げる「若者の活躍の場」と我々の「アート場」という場の指向性において時間を追うごとに齟齬が生じてきたことに起因するものであると考えられた。例えば若者機構が常駐するのに対し我々は断続的かつ短期間の滞在／活用にならざるを得ず、その時々の方の意味合いや質が若者機構側に偏り、また、訪問者からの客観的な意見として「何をやっている場所かわからない」等の言葉が聞こえてくるなど、問題は徐々に顕在化してきた。特に1階部分の、我々からすると展示のためのギャラリー空間であり機構側からすると様々なイベント、ミーティングなどを行う多目的空間という、当初両立可能と思われた空間においてさえも、両立が容易ではないことが露呈した。より具体的には大学側の企画での学生による公開制作の中で、機構側の打ち合わせなどが行われるという状況は、ある種のポジティブな新しい空間を生み出せるのではないかという我々の妥協的目論見とは裏腹に、打ち合わせなどを行う側にとっては想定通りであったが、鑑賞する側には全く難しい場となってしまった。（参照：紀要 15 号 p.39）。こうした事案の対策として、共用部分の利用方法のルール策定やスペースの使用方法の見直し（下図）などが加えられた。



プリン1階 上が改装後、下が改装前。色付けされたところが造形大学占有エリア、それ以外を若者機構エリアとした。

また「ヤングアート長岡」や他の展示など学生による実験的な発表の場としての活用は本年度もほぼ昨年度と同数のプロジェクトが実施された。しかしながら利用増とはならず、学内での認知も伸び悩むという新たな問題も出てきた。

### 「座シネマ」改装試行

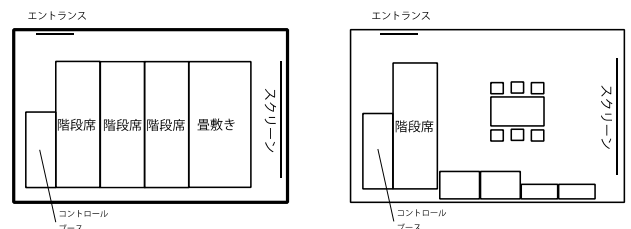
当初よりミニシアターとして占有するのではなく状況に応じてミーティングやその他の用途でも使用できるようにと、階段状の客席など可動式の構造を採用したが、実際にはシネマ以外の利用頻度は低く、「ヤングアート長岡」のトークイベントに限られていたため、機構側の要請もありミーティングルームへの改装（下図）を試みた。

客席部分の2/3を壁側に移動して、壁面の暗幕を取り外

す作業自体は半日足らずで完了し、我々の不在時に主に若者機構のミーティングに使用された。



ヤングアート長岡 ゲストアーティストとのトーク風景



左が改装前、右が改装後。

### 「ながおか映画祭」公開審査

毎秋長岡で開催される「ながおか映画祭」のプレイベントとして、公募作品の公開審査会場としての運用を試みた。主に映像系の学生の参加があり、ゲストに招いた映像作家によるレクチャーと懇親会を開催した。



ながおか映画祭 懇親会風景

### バーカウンター吊り壁設営

1階奥に昨年度構築したカウンター上部に、下部と合わせたデザインによる吊り壁を設営した。これはスペースの天井部および照明が客側からの視界に入り、雰囲気を損ねるという問題に対応した処置である。業者に依頼しカウンターと同様の材を使用し、ダウンライトを仕込み、（我々自身での解体撤去を想定し）なるべくシンプルな造作で設営した。



1階カフェ・バー 吊り壁



ヤングアート長岡 芸術工事中 プリン長岡4階展示風景

### 「ヤングアート長岡 2018 芸術工事中」

今年度より春から秋に時期を移し、金曜日の夕方から土・日曜日を中心に2週にわたり開催。プリン長岡はショッピング大手と共に主会場として使用した。オープニング・レセプションに続くパーティを皮切りに、1階での展示、カフェバー・スペースでのフードとドリンクの提供、2階では例年通り座シネマで映像作品上映とゲストアーティストのトークイベントを行った。また3・4階はゲストアーティストや学生の展示会場として使用した。

### 進級制作展

昨年度に引き続き、美術・工芸学科の美術表現コース3年生による進級制作展を行った。ただし今年度は当学生らの意向により一般公開とせず、よって我々の研究としても特別なバックアップが不要となったのは残念であった。プリン長岡は3年目を迎え、徐々にではあるが学生の認知を得てきた。しかし、それが単なる場所ではなく、発信者とそれを共有する人々との関係性を構築する場であるという、本質的な意義の理解はまだまだであると痛感した。



ヤングアート長岡 芸術工事中 オープニング風景 プリン長岡1階



作品設置作業風景 1階



ヤングアート長岡 芸術工事中 プリン長岡正面

### 4. 他地域の活動の視察

本研究も中盤を過ぎ、我々が抱える問題点を客観的に捉えること、また他の事例を参照することで今後の研究に向けたヒントを得る目的で視察を計画した。主にそれぞれのプログラムや運営の方法、街と場所との関係性、建物の再活用の方法などについて、どのような取り組みがなされているのかをポイントとした。比較的情報が多く、環境的にも著しく異なる東京を除いた候補の中から兵庫県神戸市内3カ所のスポットを選択し、視察した。

#### デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO)

<http://kiito.jp>

デザインの拠点となることを目指して2012年8月にオープン。神戸港湾地区の明治期の生糸検査を行なってい



た広大な建物をリノベーションして構築されている。建物の規模同様、様々なタイプのイベント、プロジェクトが組織的に運営され、行政のバックアップも整っている。

年間のプログラム数、建物のリノベーションに投じられた予算規模も大きく、運営は少ないスタッフで効率的になされている。広く市民に開かれ、クリエイティビティを基にして食・住まで多様なプログラムやイベントで構成され、地域文化に効果的に機能している。我々の研究とは質・量共に比較にならない都市型のスペースという印象であったが、地域の専門家と参加者の協働という形態を取ったいくつかのプログラムなどは手法としてヒントとなるものがあった。

#### KOBE STUDIO Y3 C.A.P. 芸術と計画会議

[http://www.cap-kobe.com/kobe\\_studio\\_y3](http://www.cap-kobe.com/kobe_studio_y3)

神戸市の元町駅から山側に徒歩 15 分ほどの「海外移住と文化の交流センター」内にあるアートスペース。常時 12 人の様々な分野のアーティストとオーガナイザー「C.A.P. 芸術と計画会議」により運営されている、いわゆる共同スタジオである。

定期的にアーティストの入れ替えを行いながらも、アーティストたちがそれぞれのスタジオの扉を開け、ワークショップを行うなど市民にオープンにするというスタンスで展開されている。アーティストの主体的な話し合いがオーガナイザーによってバックアップされ活動が進められるデモクラティックな雰囲気が印象的であった。建物の利用の方法は我々の研究に近いかもしれないが、賃料を払い日常的な制作場所として活用しようという地元在住のアーティストの数などは比較にならず、同様の運営は我々には困難であると思われる。しかし将来的には、長岡造形大学の卒業生や美術系の U ターン・I ターン居住者が増えればこうした形態を取ることも可能だろう。

#### 旧グッケンハイム邸

<http://www.nedogu.com>

神戸の西、山陽本線塩屋駅に近い、海沿いの山麓に連なる風光明媚な扇状地にある、世帯数 2200 ほどの小規模住宅地に建つ築 100 年超の洋館。ここを中心に様々なクリエイターが周辺に移り住み、新しいコミュニティを生み出している。

オーナーであり管理人でもある森本アリ氏を中心にアーティスト、ミュージシャン、様々なクリエイターが集まり、新住民の転入が地域の活性化に繋がっている。ライブスペースとしても認知され、音楽関係での人的交流が活発であり、それが様々な人々を呼び寄せる誘引になっている。

森本氏の特有のプロデューサー的立ち位置と旧グッケンハイム邸というシンボリックな建物が相まって魅力的な連鎖が有機的に広がっていくというパラダイス的な状況は、なかなか真似をすることのできない事例としてただ羨ましく眺めるばかりであった。ただし、長岡においても音楽のコミュニティは力強さを保っており、デザイン・アート分野との協働によって進める余地は大いにあると考えられる。

これらの視察を経て痛切に感じたのは、それぞれが特殊解であること、さらに都市の規模や形態、またはボヘミアン指数(\*1)的な人口の質の差異からも我々の研究にそのまま流用できそうな方策は少ないことだ。その一方で、所与の条件を深く捉えることにより、その特殊性をもとにオリジナリティのある活動の可能性を見出すことができるということを改めて考えさせられた。

### 5. 3年間の研究総括、考察

#### 5-1 フレキシブルな空間という幻想

我々の目論む“デザインとアートのオルタナティブなスペース”は、その特殊性そのものが場所の形態やしつらえに表現されるケースが多い。これは国内の先例を見てもそうであるように活動内容がそのまま場所の顔となって現れる。無論それらのスペースの一部に多目的なスペースが内包されることはあり得るが、我々の研究にとって多目的性が主となるスペースは既存の公共施設や民間のレンタルスペースとなんら変わらず、目指すところではなかった。若者機構との連携を模索する中で、多目的でフレキシブルな空間ということが幾度となく検討されたが、結果的にはその妥協点は空間としての曖昧さとしてしか現れなかった。

端的には、ギャラリースペースとミーティングスペースは共存可能かという問題があった。作品の展示空間で若者機構側のミーティングが行われる、それは一見すると創造性のある会議の場面といったイメージがあるが、実際には、外から訪れる鑑賞者にとっては立ち入るのに躊躇する空間となってしまう。空間デザインにより回避の可能性はあるかもしれないが、我々はそれを見出すことができなかった。若者機構が立脚する若者、仕事への指向が我々のデザイン・アートと食い違うというのも、若者機構のみならず今日の社会の趨勢とデザイン・アートとの関係性の脆弱さとしてマクロに捉えられる問題でもあり、今後の課題として残された。またミクロな問題としての、異なる組織の相互乗り入れ空間の問題についても、空間デザイン的な取り組みにより解決の可能性を探り、互いの長所を増幅する関係性を見出すことの難しさを痛感した。

#### 5-2 デザイン・アートスペースの構築

我々の研究は、「長岡の中心市街地に多い未活用の建物を、賃料をなるべく抑えて借り、リノベーションしつつデザイン・アートスペースの構築を目論む」というものであった。無論この目論見自体にフィージビリティという側面があるとしても、場所の構築・運営という観点からすれば満足いくものにならなかったと結論付けるしかない。

これらの原因を考えるならば、前段の若者機構とのスペース共用の問題はかえって瑣末であり、より大きな問題が横たわっているようにも感じた。例えば、デザインとは何か、アートとは何かといった根元的な問題に端を発するものである。作品を鑑賞するというのはどのようなことか、作品が壁や床に置かれる、そのしつらえや照明の在り方などの物理的な問題から、その空間内での立ち居振る舞いに及ぶ、利用者を含めた暗黙の了解にコンセンサスが得られているかどうか。そこまで視座を広げ考えなければならないという、当たり前の前提を再確認する必要性を改めて痛

感する（そもそもこうした根源的な問題と、そのことの価値を社会と共有するための場が、我々の目指したデザイン・アートのスペースの構築の意図であったという、鶏が先か卵が先かの思考のスパイラルに陥る）。

### 5-3 想定との隔たり

当初、地方創生の気運の中で設立間もない若者機構が中心市街地に若者の居場所を探しているということで、我々の場所探しと協調できるのではないかということになり、場所の決定、リノベーションまでこぎつけた（参照：『長岡造形大学研究紀要第14号』p.85）。しかしながら、その後も建物の設備の問題（\*2）、作業スケジュールのやり繰りなどの問題が重なり、我々の活用は遅々としたものとならざるを得なかった（参照：『長岡造形大学研究紀要第15号』p.39）。また、物件の賃料についても、床面積、立地から算定されるほぼ相場通りの金額となり、空き物件の賃料をなるべく抑えることには踏み込めなかった。

さらに、アートスペースとしての場を構築する最も初歩的な条件、即ち活動者がその地域との関係を築くこと、つまりある程度の頻度と密度で近隣コミュニティに参加することが難しかった。これは主に大学での仕事量との関係によるものである。その解決策として関与の頻度を上げるためにマンパワーを増やすこととし、学生に協力を仰ぎ、展示やイベントなどを本研究としてバックアップしながら行うことも試みた。しかしながら我々と共に学生らが街に目を向け、街に積極的に関与していこうという姿勢の醸成までは至らず、活動の量とバリエーションを増やすにとどまった。これは学生の生活活動圏として中心市街地への関心の低さの現れ（\*3）と言えるであろう。

この研究は引き続き新しい体制のもと継続されている。街の中でのデザイン・アートの場所作りは、実体的なシーンを作り出すところまでと捉えるのなら短期間でなし得るものではない。またゆくゆくはこうした活動が研究を離れ、具体的にデザイナーやアーティストの生活の中に取り込まれて実践されることを期待するなら、実践の実験的研究としてのやるべき課題は、物件の確保、運営、プログラム、情報の共有など多岐にわたり山積みである。

\* [参考文献] 遠藤良太郎ほか、「地方都市中心市街地におけるデザイン・アートワークの役割」、長岡造形大学研究紀要第14、15号。

\* 1 地域の芸術関連（芸術家、音楽家、作家等）人口比率。

\* 2 中心市街地の空き物件活用はハード、ソフト両面にわたり難易度が高い。ハード面では我々が企図した、子供から大人まで広く市民が集う場所として必要な安全性の確保において、すなわち消防法、耐震基準等における基準を満たすことなどにおいて様々なハードルがあり、DIY・プリコラージュ的な手法には限界がある。またソフト面では、そのような手法に対する認識や理解が不動産オーナー、仲介業者共に我々と異なるレベルにあり合意形成に難航したことによるものであった。

\* 3 信濃川に隔てられた地域の隔絶の大きさ。物理的な距離以上のものとも思える大きなギャップがあると考えられる（学生の関与の難しさについては紀要15号p.39を参照）。さらに付け加えるなら、ひとつには公共交通機関、駐車場といった交通機関問題があり、ふたつ目には生活活動圏として川で分断される東西の隔たりが大きく、相互への関心が薄い、もしくは限定的になっている。これは学生のみならず一般市民の意識の中にもあるように見える。